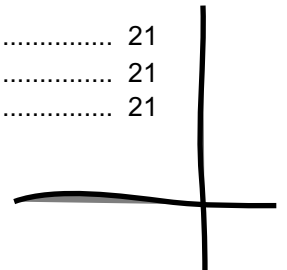


South Wind

港区国際交流協会
Minato International Association

目次・Contents・目录

米国からの投稿～カリフォルニア模擬国連に参加して	3
CALMUN Report	4
来自美国的投稿～参加加州模拟联合国会议	5
日本人との付き合い方	6
Getting along with the Japanese	6
怎样与日本人交朋友	7
일본인과 사귀는 법	7
バンコク四方八方(16) 微笑の国タイから～アジアを舞台に生きる！（上） ～名悪役、ヨコスカ潮也さんの挑戦～	8
All Directions of Bangkok (16) From Thailand - A Pleasant Country Asia is his stage (1) Yokosuka Shioya-san's Challenge, The Excellent Villain	9
来自微笑的国度泰国—曼谷的四海八方(16) 以亚洲为舞台（上） 著名反派演员横须贺潮也先生的挑战！	9
メキシコ便り(12) グアナファトからこんにちは！	10
A letter from Mexico (12) Hello from Guanajuato	10
来自瓜纳华托的问候（12）墨西哥来信	11
Saludos desde Guanajuato (12)	11
スティーヴンス・はるみのアメリカ便り(35) 世界最初の飛行	12
A letter from the U.S.A. (35) First In Flight	13
美国信笺(35) 首次飞行	14
ニュージーランド便り(27) アオテアロアより	15
A letter from New Zealand (27) Hello from Aotearoa	16
新西兰鸿信(27) 来自阿欧泰阿罗阿	17
レッツ・チャット・イン・ジャパニーズ(LCJ)	18
Let's Chat in Japanese (LCJ)	18
让我们用日语进行对话	19
South Wind 原稿 — トイレ事情大募集	20
Your speculation about the world's toilets	20
South Wind 原稿 — 厕所情况大征稿	20
編集後記	21
Post-script	21
编辑后记	21



South Wind ロゴマークデザイン：清水春奈（しみずはるな）・・・

油彩を専攻し、卒業後は芸術学科で指導もおこなうかわら、雑誌などでイラストレーターとしても活躍。デジタルアート、粘土オブジェ制作もする。プライベートでは1人娘が誕生し、楽しい妻・母ぶりを発揮。生粋の江戸っ子であり、粋人でもある。

Haruna SHIMIZU, designer of South Wind's new weathervane logo

After graduating with a major in oil painting, Ms. Shimizu became an instructor in the art department; she also works as an illustrator for magazines and other media and creates digital art and clay objects. In her private life, Ms. Shimizu, a true “Edokko” (a native of Tokyo) and woman-of-the-world, enjoys being a wife and the mother of one daughter.

南风杂志标识记号设计：清水春奈（SHIMIZU Haruna）・・・

油画专业，毕业以后在艺术系做指导教师的同时，还在杂志上作为一个插图画家大显身手。也进行数字艺术、粘土题材创作活动。在私生活方面，有一个女儿，是一位快乐的贤妻良母。是地道的江戸人，也是一个多才多艺的人。



港区国際交流協会 交流サロンのご案内

参加者が自由におしゃべりする場として、隔月第三金曜日の夜、「交流サロン」を開いています。200円程度のスナック菓子をご持参の上、ご参加ください。詳細はお問い合わせ下さい。Tel. 03-3578-3530

10月17日（金）午後6時30分～8時30分
港区役所10階1012会議室

MIA Friendship Lounge – Let's talk over a cup of tea!

We welcome your attendance at our MIA Friendship Lounge. The 3rd Friday of every 2nd month is your time to participate in mutual understanding and communication between Japanese and non-Japanese residents. Feel free to visit the space and please bring a snack worth 200 yen with you. For details, please call MIA at: 03-3578-3530.

Oct. 17 (Fri.), 18:30-20:30
Minato City Hall 10th floor, #1012

交流社交室情報

为了促进，外国人和日本人的交流，隔月第三个星期五晚上，以下时间举办交流社交室，届时请邀请朋友一起参加。参加者请携带200日元左右的小吃参加。详细的情况请打电话询问：Tel. 03-3578-3530

10月17日（星期五）下午6:30-8:30 于
港区区役所10层1012会议室

米国からの投稿～カリフォルニア模擬国連に参加して

田代 準之介（日本）

2003年3月1日、僕はロサンゼルス近郊で行われたカリフォルニア模擬国連（California Model United Nations）に、僕の通っているハイスクールのクラブのメンバー五人とともに参加しました。メンバーはそれぞれエクアドル、モーリシャス、オーストリアの三カ国のうちの一つの代表として会議に臨みました。僕はエクアドルの代表者でした。

会議に行ってみてまず驚いたのは、参加者の多さでした。会議には合計21校の高校、大学からの参加者が集まっていました。僕の予想に反して、高校生よりも地元の大学生の方が参加者は多かったようです。彼らが代表する国々は合わせると、その数は150近くにもなりました。参加者は、国連総会、経済社会理事会（ECOSOC）、平和維持活動特別委員会、アラブ諸国連合、安全保障理事会など、合計六つの委員会のどれかに参加しました。それぞれの委員会ではあらかじめ用意されたテーマについて話し合いました。最年少の僕（13歳）から、大学4年生まで参加者の年齢の幅が広がったため、各委員会は参加者のこれまでの模擬国連への参加経験の度合いによってどの委員会に参加できるかが、あらかじめ決められていました。僕は、今回が初めての参加だったので、ECOSOCに他のメンバー一人と共に参加しました。

ECOSOCでは、初めに参加者の出席をとり、一回のスピーチの制限時間や、それに対するコメントの時間と数などを出席者で決定しました。一連の手続きが終了すると、スピーチが始まりました。皆はスピーチの中で、議題に対する自分の考えを述べたあと、委員会の最後に採択する決議案の原稿作りへの協力を参加者に呼びかけていました。

スピーチとコメントが何回か終わると、出席者の一人の提案で会議が一時中断され、caucus（同じ考えを持った人々が集まって話し合いをすること）が開かれました。見ると参加者のほとんどがすでにお互いに自己紹介を済ませ、議題に関する意見交換をしていたようでしたが、僕は自分の周りで何が起きているのかわからず、初めのうちはただ黙って自分の席に座っていました。

三回目のcaucusが終わると、僕は用意してきた自分のスピーチを発表し、その中で、議題に対する自分の意見を述べました。そして、そのころには、僕は自分がcaucusの時には何をすればよいのか大体わかってきたのですが、遅すぎたようです。次のcaucusで決議案の原稿作りのために自主的に結成された幾つかのグループの一つに加わろうとしたのですが、どのグループでも決議案は半分近く完成し

ているということがわかりました。そこで僕は各グループでどのように作業が進んでいるかを見て回りました。

最後にECOSOCとしての決議案への投票が行われました。出席者は一人につき三回投票する権利が与えられました。僕は三つの決議案はどれも否決する必要はないと考え、また、仕上げの段階で、みんなが完成に向けて努力していたことを思い出し、全ての決議案を支持しました。結果としては三つ中一つだけ否決されてしまいましたが、反対にまわった参加者の中には自分の意見を容易に変えようとしないう人も多かった中で、三つあったうちの二つの決議案を採択できたということはとてもよい結果だったと思います。

この会議は非常にすばらしく、とても深く印象に残りました。会議全体として特に感動したことは会議が驚くほど厳密に国連の会議の進め方に沿って行われていたことです。これは国連のことをすべて知っているわけではない僕の想像なのですが、僕の参加したカリフォルニア模擬国連は、実際の国連の会議に近いものだったのでないかと思います。僕がそう思った理由は二つあります。一つ目は会議を実際に始める前にスピーチの制限時間を決めるなどといった過程を踏んだこと、そして二つ目に、参加者は全員本当にその国の人びとを代表しているかのように発言することが求められた、ということです。たとえば、一人の参加者が、ある事柄に対して「私は……と思う。」などというように言った場合、議長から「個人的な意見ではなく、国民の代表としての意見を述べるように。」と、厳しく注意されていました。

僕はこの会議のすべての活動に参加できたわけではありませんが、初めての模擬国連への参加はとても貴重な体験となりました。この会議に参加して、僕は、国連に関してより深く知ることができたと思います。特に、一国の代表としてみんなと話し合いをすることによって国連の基本的な役割—加盟国との話し合いによって地球規模の問題に対する解決策を生み出すこと—に改めて気付かされました。また、僕たちが一日の会議の間に行ったことはニューヨークの国連本部で行われていることとは違っているかもしれませんが、国連の会議を真似てみることによって、僕は、会議に一国の代表として参加することの難しさも知ることができました。

田代準之介（タシロ ジュンノスケ）：14歳 米国・カリフォルニア州・パロアルト在住 パロアルト高校1年生終了 港区立飯倉保育園卒

CALMUN Report

Junnosuke TASHIRO (Japan)

On Saturday, March 1, 2003, I participated in the California Model United Nations Conference in Long Beach, California. I attended the conference with five other members of a school club I joined last September. Each of us represented a country. I was a delegate from Ecuador.

To my surprise, the conference was fairly large. 21 colleges and high schools participated, but colleges had the majority of the delegates. They represented nearly 150 nations from around the world. Six sessions were held: The General Assembly, The Economic and Social Council (ECOSOC), The Special Committee on Peacekeeping Operations, The Security Council, The Arab League Commission, and The Organization of American States. I was assigned to The ECOSOC with another delegate from my club. We addressed issues that had been decided beforehand by the committee.

The ECOSOC began with registration, followed by various protocol decisions, such as the time limit for speeches, the number of comments allowed after a speech, etc. The speeches began after all the formalities were completed. Most of the speakers spoke about their opinion of the committee's topic and asked for delegates to join them in writing a resolution.

Caucuses were held after every few speeches. In the first caucus, most of the participants seemed to have already introduced themselves to each other and exchanged opinions on the committee's topic. I did not understand what was going on, so I was not very active during the first couple of caucuses.

After the third caucus, I made a speech giving my opinion on the committee's topic. By then, I had figured out what I was supposed to do in the caucuses, but it was too late. During the caucus that followed my speech, I tried to join one of the groups of delegates that were organized to make a resolution, but in every group almost half of the

resolutions had already been completed and it was difficult to join in. Therefore, I began walking around the room observing each group's accomplishments.

Our committee was closed after the final vote on our committee's resolutions. Each of the delegates was allowed three votes. I voted for all three resolutions, but as a matter of fact, one of the resolutions failed. However, I personally thought that passing two out of three resolutions was a remarkable thing, considering the fact that there were many aggressive and headstrong delegates.

This conference impressed me in many ways. One of the things that impressed me about the conference was that it was incredibly formal. Although I did not and still do not completely understand the UN I think the conference we had was very close to the original. I base this belief on all the protocols that we covered before beginning the conference. When the conference began, every participant was expected to speak as though they were actually representing their country. By imitating the UN, it made me feel how difficult it is to attend a conference as a delegate of a nation.

My first attendance at the Model UN turned out to be a very valuable experience. By attending the conference, I was able to learn a lot about the UN in general. The group discussions of real-world issues helped me recognize the primary function of the United Nations: to discuss and solve the global issues that exist among the member states.

In conclusion, although I was not able to fully participate, my first experience of Model UN was very special. I would like to attend the next Model UN conference, and I recommend that every reader of my report do so as well.

Junnosuke TASHIRO is a 14-year-old boy living in Palo Alto, California (USA) who has finished his sophomore year at Palo Alto High School. He graduated from Iikura Nursery School in Minato City, Tokyo.



来自美国的投稿～参加加州模拟联合国会议

田代 准之介（日本）

2003年3月1日，我和同一所高中俱乐部的5位同学一起参加了洛杉矶近郊举行的加州模拟联合国会议。成员有来自厄瓜多尔、毛利求斯、奥地利三国中的一国作为代表参加会议。我是作为厄瓜多尔的代表参加此次会议的。

到会后让我感到吃惊的是与会者之多。共有21所高校及大学的参加者聚集于此。和我的予想相反，当地的大学生参加者要比高中生多的多。和他们所代表的国家合计起来快近150了。联合国总会、经济和社会理事会（ECOSOC）、和平维持活动特别委员会、阿拉伯各国联合、安全保障理事会等六个委员会中的一个委员会出席者是要参加的。每个委员会都有事先准备好的议题来就此进行交谈。因为有从年龄最小的我到大学四年级的学生为止参加者的年龄幅度大的原因，每个委员会事先根据参加者至今为止每个成员在模拟联合国的经验的多少来决定能参加哪个委员会，我是因为第一次参加的原因，于是便和别的成员加入了ECOSOC的会议。

ECOSOC里，最先是决定出席者，然后再制定和限制每次发表演讲的时间及回答问题的时间、数量。这一连串的手续结束之后演讲才刚开始、大家在演讲中陈述各自对议题的看法，委员会最后才呼吁参加者协助编写被委员会通过的决议案的原稿。

在几次演讲、回答问题结束后，与会者中一个成员的建议会议会被一时中断、于是Caucus（拥有一样想法的成员聚集在一起讨论）就开始了。先是自我介绍、然后好象再是关于议题的意见交换，而我则不知道这一切，刚开始只是静坐着旁观。

到第三次的Caucus一结束，我便发表了自己准备好的发言稿。在稿中，涉及到议题发表了自己的想法就在此时我也渐渐地感觉到Caucus中自己应做些什么，不过稍许好象迟了一点。想加入下一个为写决议案原稿而自由组成的几个小组中去的，可是发觉到

无论么小组都已将决议案原稿的一半快完成了的时候，我便开始在个个小组中走来走去观察一下整个过程是如何进行地。

最后进行的是作为ECOSOC的决议案的投票工作，出席者中每一个人都拥有三次投票的权利，我考虑到三个决议案中无论哪一个都没有被否决的必要、尤其回想到在最后完成，阶段，彼此为此所做出的努力，便对所有的决议案投了赞成票。最后三个决议案中有一个还是被否决了。站在反对一边的与会者中有许多人是属于自己的意见不轻易改变的，这样的话三个中有二个能被采纳也是不错的结果。

此次会议非常精采，因此就特别地留在记忆中。最让我感动的是整个会议的进程是那么使人吃惊地严格地按照联合国的进程被紧凑地安排起来的。我想我所参加的加州模拟联合国会议实际上就是类似接近于联合国会议而不是我所想像地联合国的所有一切都了如指掌的模拟国连。我之所以这样想有2个原因，其一是在会议正式开始之前先要限制决定演讲时间，其二是全体与会者的每一个人能否代表自己的国家发言。比和有一位出席者在对某个问题的回答时，说了「我想……」之类的发言，议长便立刻严厉地指出「不是个人的看法、你应代表全体国民来陈述意见」。尽管我并没能参加此会议的全部的活动。但是第一次参加了模拟联合国会议这对我来说是一次很宝贵的经验。通过这次会议，使我对于联合国有了更深的了解。特别是更了解和体会到作为一个国家的代表大家通过座谈的方式由此而产生对地球规模问题的解决方针，这也是联合国的最根本的任务。另外，我们在这一天的会议中所进行的工作或许和纽约的联合国本部所做的有所不同，但是象这样通过模拟形式开会的方式、使我由此深感到作为一国代表列席的难处。

[翻译：王晓菁]



日本人との付き合い方

趙 顯哲 (韓国)

【2003年6月26日記】

皆さんは日本人と上手に付き合っていますか？

私たち外国人は、日本人とうまく付き合うために、どのような点に気をつければ良いのでしょうか？

日本に住んでいるのに、日本人と出会うチャンスが少なく、悩んでいる留学生もたくさんいると思います。皆さんは日本人と出会って話せる所を知っていますか？

私は日本に来て約11カ月がたち、その間に色々なところを訪ねてみました。その中で特に皆さんにお勧めしたいところは国際交流協会です。この交流協会では、日本人と色々なテーマについて話ができます。

日本語が上手ではなくても、自信を持って声をかけてみれば、きっと良い友だちができると思います。

しかし、日本人と話す前に、私たちが気をつけなければならないことは、日本人が「イエス」、「ノー」をはっきり言わず、本音を話そうとしないと決め付けてしまうことです。それは、日本には以心伝心、察しの文化があるからではないかと思えます。自分の国と日本の文化や習慣の違いを理解しようとする仲間に、私を含め「郷に入れば郷に従え」ということわざを贈りたいと思います。

言語学習の方法は色々ありますが、その中で友だちを作って付き合いながら、言葉と文化と一緒に学ぶことが一番良い方法だと思います。ですからお互いの文化を理解し、そして尊重しあうことが、上手に付き合っていく為の重要な鍵になると思えます。

皆さんお互いにベストを尽くして頑張りましょう。

趙 顯哲：1977年生まれ、京畿道水原市出身、現在池袋居住、アークアカデミー在学中

Getting along with the Japanese

CHO Hyun-chul (South Korea)

[June 26, 2003]

Do you get along well with the Japanese? What points do you think foreigners like me need to pay attention to in order to get along well with Japanese people?

We live in Japan, but I think many foreign students are troubled because we have very few chances to meet Japanese people. Do any of you know of places where we can meet and talk with Japanese people? I have been in Japan for 11 months and, during that time, have visited many places. Among them, I would like to recommend the Minato International Association. I can talk about many subjects with Japanese people there.

Even if I don't speak Japanese well, I can confidently speak to someone with the feeling that I can make a good friend. However, before speaking with a Japanese person, we must understand that Japanese people do not say "yes" or "no" clearly and do not like to talk about their real feelings. I think that is because the Japanese culture is one of tacit understanding. To those students, myself included, who make no effort to understand the differences between their own country's culture and customs and those of Japan, I would like to give the proverb, "When in Rome, do as the Romans do."

There are many ways to study a language, but I think the best method is to make friends and learn the language and culture together while associating with them. That way you can gain a mutual understanding of each other's cultures and I think this mutual respect is the key to getting along well. Let's all strive to do our best for each other.

Hyun-chul CHO was born in Gyeonggi-do, Suwon City, South Korea in 1977. He currently lives in Ikebukuro and is a student at Arc Academy.

[Translated by: L. KAWASHIMA]



怎样与日本人交朋友

赵显哲 (韩国)

[2003年6月26日记]

大家是怎样和日本人接触的呢?对我们外国人来讲,怎样才能和日本人接触,而且在交往中要注意点什么才好呢?

在日本住,但很少有机会和日本人接触,特别是我们留学生。有谁知道能与日本人交往的好的地方和方法吗?

我来日本已有11个月了,在这期间我去了各种各样的地方,在这期中,有人告诉我应该去国际交流协会,在这交流协会有日本人,还有很多话题丰富的交流会。

我想是日语说的不好没关系。只要有自信,自己找上去,一定是会交上日本人的朋友的。但是和日本人谈吐以前,我们一定要注意的是,日本人不直接了当的说“是”还是“不是”,从不发表直接的意见来决定事物的。

我想,我们应该以心换心,来观察文化吗!自己国家的文化,生活习惯都与日本不同,包括我在内,我们有句俗语「入乡随乡」的说法。

学习文化,言语的方法有各色各样。在这期中,想与人交往做朋友,我想是应该在学习言语文化的同时进行才是最好的方法。在互相的文化、习惯理解,相互尊重的前提下才能和日本人接触交往,和能做上真正的朋友。这才是重要的关键问题。

让我们大家相互的尽勤的努力吧!

赵显哲 1977年生。京几道水原市出身,现在住池袋, Arc Academy 在学中。

[翻译:石井 通惠]

일본인과 사귀는 법

조현철 (한국)

[2003년 6월 26일]

여러분은 일본인과 잘 사귀고 있습니까?

저희 외국인들은 일본인과 원만히 사귀기 위해 어떤 점에 주의하면 좋을까요?

일본에 살고 있으면서도 본토인과 대면할 기회가 적어 고민이 되는 유학생들도 많이 있을 것이라고 생각합니다.

그래서 저는 일본인과 사귀는 좋은 방법을 제안하려고 합니다. 여러분은 일본인과 만나 대화할 수 있는 곳을 알고 계십니까? 저는 일본에 온지 약 11개월, 그동안 여러 곳을 찾아가도 보고 들러 봤습니다. 그 중에서 특히 여러분에게 적극 추천하고 싶은 곳은 "국제교류협회"라는 모임입니다. 여기에 가면 일본인과 어울려 일어로 여러가지 주제에 관해서 토론할 수 있습니다. 일어를 잘 할 수 없어도 자주 만나서 자신감을 갖고 성실하고도 능동적으로 대화에 성의를 보인다면 틀림없이 좋은 친구가 생길 것으로 봅니다.

단, 일본인과 대화할 때 주의할 사항은 일본 사람들의 대답에는 YES와 NO가 분명하지 않고, 본심을 드러내지 않는다는 선입감으로 임하는 것은 금물입니다. 그 것은 다른 나라와는 달리 일본에는 이심전심과 통찰의 문화가 엄연히 존재해 오기 때문이라고 생각합니다.

자기 나라와 다른 일본의 문화와 관습을 선뜻 이해하고 받아들이기 어려운 사람들에게는 "로마에 가면 로마의 법을 따르라"라는 격언으로 대신하고 싶습니다. 언어학습방법은 다양하지만, 그 중에서도 일본인을 친구로 삼아 함께 놀 사귀는 것이 언어와 문화를 동시에 배울 수 있는 가장 좋은 방법이라고 사료됩니다. 또한 상대방의 문화를 이해하고 존중하는 것이 일본인과 어울려 사귀는 중요한 열쇠라고 생각합니다.

여러분 우리 서로 최선을 다합시다.

조 현 철 1977년생 경기도 수원시 출신, 현재 이케부크로 거주, 아크아카데미 이케부크로교 재학 중



バンコク四方八方 (16) 微笑の国タイから～アジアを舞台に生きる！(上) ～名悪役、ヨコスカ潮也さんの挑戦～

岩船 雅美(日本)

【2003年6月1日記】

「俺が、タイでどこまでできるか、見ていただきたいんです！」

--日本の皆さんへのメッセージはありますか？との問いに、鍛え上げられた体を乗り出し、野太い声の主は、こう答えた。

ヨコスカ潮也(しおや)さん、俳優。43歳。

そのたまたまの醸し出す迫力といたら、まるで野武士のようだが、印象的な瞳は磨き上げられた黒曜石のように滑らかで、この人の感情の細やかな動きと、喜怒哀楽の深さを感じさせる。

ヨコスカさんの俳優としてのキャリアは20年以上に及び、数多くの映画やテレビ、CMに出演。中でも、悪役の演技には定評があり、その存在感にほれこんだファンは数多い。

だが、激しいアクションを要求される演技の連続に膝を痛めてしまい、昨年から休養を余儀なくされてしまった。しかし、ヨコスカさんの類稀な才能を惜しむファンや関係者からの、復帰を待ち望む声は日増しに高まるばかり。

そんなヨコスカさんが新たな挑戦の場所として選んだのがアジアだった。

今年の3月、多くの人びとの期待と支援を受け、ヨコスカさんはバンコクに渡った。

さて・・・、袖振りあうも他生の縁、といい、まさに縁あってヨコスカさんと知り合いになり、その波乱の人生をじっくりとかがうことができた。

「バンコク四方八方」、今回と次回で、ヨコスカさんの波乱の人生と、アジアを舞台にした新たな挑戦をお届けしたい。

ヨコスカ潮也さんは、その名の通り横須賀生まれ。映画が何よりも好きだった中学生時代から、俳優を夢見るようになった。中でも、悪役は別格の存在で、数多くの映画を観るうちに、ヨコスカ少年は、映画の中に占める悪役の存在の重要性、大きさに惹かれるようになっていったが、その夢がかなうには、まだしばらく時間が必要だった。

1977年、水産高校を卒業したヨコスカさんは、海外で働きたい、という希望をもち、アフリカのガーナにあるマグロ・カツオの遠洋漁業の基地で働くことを決意。1年間の契約で、単身、ガーナに渡った。

当時の日本では、高校を卒業してすぐに海外で働く若者は珍しく、NHKのテレビ番組「若い広場」の取材を受け、30分ほどのドキュメンタリーにして放映された。

「今にして思えば、あれがテレビカメラに写された、はじめての経験でしたね」と、ヨコスカさんは当時を懐かしむように語る。

漁業基地での仕事は厳しかった。いったん漁に出てしまえば、マグロやカツオの群を追い続け、巨大な船倉が漁果で埋め尽くされるまでは、何ヵ月も陸には戻れない。激しく揺れ動く船上、鋭利な釣り針がとびかう中、アフリカ人も日本人も一緒になって作業にあたり、戦場のような騒ぎだったという。実際、ヨコスカさんは、頬に釣り針が刺さったことがあるという。

仕事はやりがいがあったし、契約期間が切れた後でも、このまま働かないか、という誘いもあった。しかし、ヨコスカさんは、日本に帰ることを選んだ。「俳優になりたい」、その願いを片時も忘れることはなかったからだ。(続く)



All Directions of Bangkok (16) From Thailand—A Pleasant Country Asia is his stage (1) Yokosuka Shioya-san's Challenge, The Excellent Villain

[June 1, 2003]

“I'd like you to see how well I can do in Thailand!” To answer the question, “Do you have any message for the people in Japan?” the man with a muscular body and deep voice asked leaning forward.

Yokosuka Shioya-san, a 43-year-old actor.

From his appearance he looks like a wild warrior. However, the pupils of his eyes, which show his delicate and profound feelings, are as smooth as polished obsidian.

Yokosuka-san's career as an actor spans more than 20 years and he has performed in quite a few movies and on television. Particularly, he has established a great reputation for performances as a villain. He has many fans who are captivated by his presence.

Unfortunately, he was obliged to take a rest last year because of pain in his knees which resulted from a series of demanding violent action scenes. The voice of his fans, who greatly value his unique talent and look forward to his comeback, is getting louder and louder day by day.

In that situation, Yokosuka-san has chosen Asia as his new stage of challenge.

He came to Bangkok in March this year with expectations and support from many people.

Well... even a chance meeting is due to the Karma in a previous life. By a curious turn of life, I got acquainted with Yokosuka-san and closely listened to the story of his eventful life.

Throughout Bangkok with focus on Asia, I would like to spread knowledge of his colorful life and new challenge in Asia.

Masami IWAFUNE (Japan)

Yokosuka Shioya-san was born in Yokosuka, as is evident from his name. He started chasing the dream of becoming an actor when he was a movie-addicted junior high school student. Particularly, playing the role of a villain was very special. While seeing numerous movies, he became charmed by the importance and greatness of its existence. However, he had to wait for some time to make his dream come true.

Yokosuka-san graduated from a fisheries high school in 1977 and went alone to the Republic of Ghana under a one-year contract to work at the base of a deep-sea fishery dealing in tuna and bonito.

There weren't very many young people who worked abroad upon graduation from high school, and he was interviewed by “The Youth Square,” one of the programs aired on NHK. It was telecast as a 30-minute documentary.

“It was my first encounter with television.” Yokosuka-san sounds like he thinks fondly of those old days.

The work in the fishery base was tough. Once you go fishing, you keep going after schools of tuna and bonito, and don't return for months until the hold of the ship gets full of catch. The ship pitches and rolls fiercely and sharp fishhooks flit around: both the Africans and the Japanese unite their efforts and the excitement is similar to that felt in a battlefield, Yokosuka-san said.

The hard work paid off and he was offered another year after the contract expired. However, Yokosuka-san decided to come back to Japan, for he could not forget about his dream of becoming an actor even for a moment. (To be continued)

[Translated by: M. KAWASHIMA]

来自微笑的国度泰国—曼谷的四海八方 (16) 以亚洲为舞台 (上) 著名反派演员横须贺潮也先生的挑战!

岩船 雅美 (日本)

[2003年6月1日]

“我想让大家看看，我在泰国究竟能努力到什么程度”横须贺实蕉匀毡镜呐筒衙怯惺裁椿耙 说时，他挺起训练钵氏那孔车男犀牛 用粗大的嗓门做出了这样的回答。

横须贺潮也先生，演员，43岁。

那气势简直就象是一个乡村武士，但那给人以深刻印象的眼睛仿佛黑曜石一样明亮清澈，让人能够感受到也感情的细微变化、感受到他深深的喜怒哀乐。

横须贺先生的演员生涯长达20年以上，在许多电影、电视以及电视广告中扮演过角色，尤其是表演反派人物的技巧受到了好评，他的存在使许多影迷为其倾倒。但是，由于他的演技要求接连做出剧烈的动作，因此膝盖受到损伤，从去年开始不得不去休养。然而，那些珍惜横须贺先生才能的影迷和有关人士盼望他复出的呼声日益增高。在这种情况下，横须贺先生把新的战场选在了亚洲。今年3月，横须贺先生肩负众望，来到了曼谷。

他许是前生的缘分吧，我有机会与横须贺先生相识，并详细了解到他充满波澜的人生。我准备横须贺先生充满波澜的人生旅途和他以亚洲为舞台所作的新的挑战发给这期和下期的“曼谷的四海八方”。

横须贺潮也先生，人如其名，出生在横须贺。中学时代，电影是他最大的爱好，并梦想能成为电影演员。其中反派人物是一种特殊的存在，在大量观看电影的过程中，少年横须贺被电影中反派人物所占的重要地位所吸引，但那时离他实现梦想还有一段距离。

1977年，横须贺先生从水产高校毕业，抱着去国外工作的愿望，决定到位于非洲嘉纳的金枪鱼·鲑鱼的远洋渔业基地去工作，他签了一年的合同，单身前往嘉纳。在当时的日本，高中毕业后马上到海外去工作的年轻人很少，NHK电视台“年轻的广场”节目采访了他，并制作了大约30分钟的专题节目。横须贺先生在回忆当时的情景时说：“现在回想起来，那是我第一次上镜头。”

渔业基地的工作十分辛苦，出一次海，要不停地追赶金枪鱼和鲑鱼的鱼群，直到将巨大的船舱充满，几个月都不能返回陆地。在剧烈颠簸的船上，尖利的鱼钩四处飞舞，非洲人和日本人在一起工作，就仿佛置身于战场一样。横须贺先生的面颊就曾经鱼钩刺伤过。

工作本身是很有意义的，而且合同到期以后有人提出请他继续这份工作，但是，横须贺先生的选择是返回日本。

“我要当演员”——他从未丢掉过这个愿望。

[翻译：栗文霖]

メキシコ便り (12) グアナファトからこんにちは!

小野田 マサ子 (日本)

【2003年5月30日記】

修士号を得た昨年9月、お世話になった学校に何か感謝の気持ちを表す必要があると考えました。植樹をするのがよいのではないかと、特に桜の木とハカランダの木を、日本とメキシコという二つの国を代表する樹木として植えるのがよいのではないかと思います。それについて、学校の庭師に意見を求めました。彼は、政府に申請書を出すようにと言いました。どうして政府の窓口に行かなければいけないのか合点がいかなかったので、学長と話しましたが、彼も政府の窓口に行かなければいけないと言いました。

それで、ある日、セントロの政府の役所を訪れました。受付係は、階段を上がって右のオフィスだと言いました。私は半信半疑で、階段を上り、若い女性に自分の学校に樹を植えたいと考えているのだが、と申しました。彼女は私の言うことを聞いてから、何の木を、何本くらい植えたいのかと尋ねました。それから、誰かに電話をして、先生は「桜の木」を知らないのだが、と言いました。私は電話の向こうの人に、桜の花は日本の国花で春になると白、ピンク、桃色の花を咲かせると説明しました。私は、桜の木がどんな木か知らないの、その代わりに桃の木を植えてはいけなかと尋ねられました。桜を植えることができないと考え少しがっかりしたもの

の、彼の提案を受け入れました。それから、官吏に植木代としていくら支払えばよいかと問いました。彼女は、それは高校の社会奉仕活動の一環なので、支払う必要はないと説明してくれました。メキシコでは、高校生の社会奉仕が教育制度の中に組み込まれており、植樹作業もこの奉仕活動の一環だったのです。そんなわけで、私は母校に対する感謝の気持ちをどのように表すことができるだろうかと心もとなく思いました。

10月になっても、そして11月になっても、何も植えられませんでした。私は、11月に帰国し、今年の2月に、またグアナファトに戻ってきました。まだ何も植えられていませんでしたので、すぐに役所に聞いてみなければいけないと思いました。3月のある日、学長が少なくとも政府が何か始めたようだ、と言うのは敷地に土が入れられたから、と伝えてくれました。しかしその後、私は急遽日本に戻らなければならなくなりました。

5月にグアナファトに戻ると学校へ行ってみました。学長が私を校庭に誘い、まだとても若木だけれど、我が校には桜の木があるんです、とおっしゃいました。あの学校の先生がどのように桜の木を見つけ出してくれたのかはわかりませんが、我が母校に、私の目の前には、確かに桜の木が植えられていました。

A letter from Mexico (12) Hello from Guanajuato

Masako ONODA (Japan)

[May 30, 2003]

Last September, when I got my master's degree, I thought that something was necessary to show my gratitude to my school. It seemed a good idea to plant trees, especially cherry-trees and jacarandas, as representatives of my home Japan, and my place of study, Mexico. I asked the advice of a gardener at the school about my idea. He told me to go to the government to file an application. I could not understand why I had to go to the government; therefore, I talked with the Director, and he also told me that I should go to the government.

Then, one day, I visited the office of the government in the Centro. The reception clerk told me to go up the stairs; the office was to the right. Although I was half in doubt about the clerk's words, I went up and spoke to the young lady about my plan of planting trees for my school. She listened to me and asked me what trees I wanted to plant and how many. Later, she telephoned someone and said to me that the teacher did not know "cherry-trees." I had to explain to that person that the flowers of the cherry-tree are the national flower of Japan and they flourish in spring with flowers of white, pink and rose. Because he did not know cherry-trees, he asked me if he could plant other trees, such as peach-trees, in exchange for them. I was disappointed at

the thought that I could not plant cherry-trees, but reluctantly accepted his proposal. Then, I asked the government official how much I should pay for the trees. She told me it was not necessary to pay, since it was a part of activities of their social services of the high school. In Mexico, social services are included as part of the curriculum for high school students, and the planting of trees was one of the activities. Therefore, I wondered how could I show my gratitude to my school.

Two months passed and nothing had been planted. When I returned home to Japan in November and returned to Guanajuato in February of this year, still nothing had been planted, and I knew that I had to ask at that government office soon. One day in March, the Director told me that the government had at least begun something, since they had transported soil to the site. But soon after that day, I had to return suddenly to Japan once again.

When I returned to Guanajuato in May I went to the school; the Director invited me to the garden and told me that although they were still very young, we now had cherry-trees. I do not know how the teacher found cherry-trees, but certainly enough, there were cherry-trees in front of me at the school.

来自瓜纳华托的问候 (12) 墨西哥来信

小野田 Masako (日本)

[2003年5月30日记]

在去年9月得到硕士学位后，总觉得有必要对承蒙教诲的学校表达谢意。经过再三考虑，觉得植树，特别是种植樱花树和巴西玫瑰木，这两种代表日本和墨西哥两国的树木应该是一个不错的想法。为此，我请教了学校的园丁，他让我向政府提交申请书。对于为什么非去政府部门不可这一点上，我一时难以理解，于是又找校长商量，可是他也对我说必须要去政府的窗口申请。

因此，有一天，我拜访了位于市区的政府机关。接待我的人让我上楼以后到右边的办公室。我半信半疑地上楼，告诉一位年轻的女士说想在自己的学校里植树的想法。她听了我的话之后，便问种什么树，要种几棵。然后，不知又跟谁打了电话，告诉我学校的老师不知道「樱花树」。我向电话那头的人说明，告诉他樱花是日本的国花，到了春天会开白色、粉红色、桃红色的花。他问我说「由于不知道樱花树是什么树，所以，能不能改种桃树呢」。虽然想到不能种植樱花

树而有点失望，但还是采纳了他的建议。然后，我又问机关里的人，需要支付多少植树费。她告诉我说，这是高中为社会服务活动的一环，因此无须支付。在墨西哥，高中生的为社会服务活动被编在教育制度当中，而植树活动也是社会服务活动的一个环节。由此，我挂念着要如何才能表达对母校的感激之情。

到了10月，又到了11月，连树的影子也不见。我11月回到日本，又于今年2月回到了瓜纳华托。但还是不见种了任何树木，我不由想到非得向政府机关询问一下才好。在3月的一天，校长告诉我政府似乎已经有所行动，将泥土搬进学校用地里了。可是，那之后我又不得不匆匆地回日本了。

5月回到瓜纳华托后，我去了一趟学校。校长把我领到校园，并对我说，我们学校有樱花树了，尽管还很小。我虽然不知道那所学校的老师是怎么找到樱花树的，但在我的母校里，在我的眼前，确确实实种着樱花树。

[翻译：蔡海东]

Saludos desde Guanajuato (12)

Masako ONODA (Japan)

[30 de mayo de 2003]

En septiembre del año pasado, cuando obtuve mi maestría, pensé que era necesario hacer algo para mostrar mi agradecimiento a mi escuela. Pensaba en plantar algunos árboles, especialmente cerezos y jacarandas, era buena como representación de los dos países: Japón y México. Pedí consejo a un jardinero de la escuela sobre eso. Me dijo que fuera al gobierno para solicitarlo. No pude entender por qué tenía que ir al gobierno. Por eso platicué con el director, que me dijo que necesitaba ir al gobierno.

Entonces, un día visité una oficina de gobierno en el centro. El recepcionista me dijo que subiera la escalera y que la oficina estaba a la derecha. Aún no lo creía, subí y hablé con una señorita sobre mi plan de plantar árboles en mi escuela. Ella me escuchó y me preguntó cuáles árboles serían y cuántos. Después llamó a alguien y me dijo que ese maestro no sabía "cerezo." El me preguntó y tuve que explicar a esa persona que el cerezo es la flor nacional del Japón y ellos florecen en primavera con flores blancas y rosas, etc. Ya que no conocía los cerezos, me sugirió plantar

otros árboles cómo los duraznos a cambio de los cerezos. Sentí no poder plantar los cerezos, acepté su propuesta de mala gana. Y luego pregunté a esa señora cuánto me cobrarían. A eso, me dijo que no era necesario pagar, ya que era parte de los servicios sociales de la preparatoria. Salí de esa oficina pensando entonces cómo podría mostrar mi agradecimiento.

En octubre, todavía no había plantado nada, y en noviembre tampoco. Después tomé el camino de Japón y otra vez regresé en febrero de este año. Todavía no he plantado nada y estoy pensando que tengo que preguntar en esa oficina dentro de pocos días. Un día de marzo, el director me dijo que ahora el gobierno comenzaba algo, ya que había a transportado tierra al terreno. Pero poco después de ese día, de repente, tuve que regresar a Japón otra vez.

Cuando volví a Guanajuato en mayo fui a la escuela y el director me invitó al jardín y me dijo: "Ahora tenemos cerezos aún muy jóvenes." No sé como fue posible para este maestro encontrar los cerezos, pero ciertamente son cerezos que han plantado y están frente a mí en el terreno de mi escuela.

スティーヴンス・はるみのアメリカ便り (35) 世界最初の飛行

スティーヴンス・はるみ

【2003年5月23日記】

今から100年前の12月23日、午前10時35分、ライト兄弟は、あの有名な歴史に残る世界最初の飛行を実行しました。オハイオ州、デイトン市出身のウイルバーとオーヴィルのライト兄弟二人は、ノースキャロライナ州のキティ・ホークという所の近くにある、キル・デヴィル・ヒルズと呼ばれる海岸沿いの砂丘の上を飛行したのです。オハイオ州、デイトン市で自転車店を経営していたライト兄弟が仕事の合間、スプールの木材(トウヒ材)、モスリンの布、ピアノ線を使って1000ドル程の資金で作上げた複葉機はこの日、人類の飛行の歴史に大きな進歩をもたらしたのです。

その歴史的飛行はたったの12秒というものでした。弟のオーヴィルが複葉機の下段の羽の上にうつ伏せになって舵を取り、約120フィートを飛行したのです。オーヴィルはこの日続けてあと2回飛行し、二度目のトライで175フィート、三度目のトライで200フィートを飛行しました。そして四度目の飛行では兄のウイルバーが試み、852フィートを飛行しました。彼らが作った物は世界で初めての、人が乗って操縦出来る、動力付きの飛行機だったのでした。

1896年、8月9日、このライト兄弟の歴史的飛行よりわずか7年前、ドイツの航空工学者のオットー・リリエンサルが自分の作ったグライダーの飛行試験中に事故で亡くなっていました。オットー・リリエンサルはグライダーの研究でその名が知られていただけでなく、世界で初めてグライダーを使って離陸、飛行を試み、成功した人だったのでした。しかし、彼の考案したグライダーは飛行方向を変えられないどころか、(風が無ければ)飛行出来ない物だったため、それが命取りになってしまったのでした。このオットー・リリエンサルの話に動かされて、ライト兄弟は自分たちの自転車店でグライダーの設計、組み立てを始めたのでした。オーヴィルもウイルバーも大学の教育は受けていませんでしたが、二人ともこの飛行の難問を解くべく、独学で熱心に勉強したのでした。

ライト兄弟が設計した最初のグライダーがほぼ完成する頃、二人はテスト飛行をするのに敵した場所を探し始めました。彼らのグライダーをテストするには広いスペースが必要だっただけでなく、強い風が常に吹いている事が条件として必要だったのでした。

1899年11月、オハイオ州、デイトン市に適当な場所がないとわかると、ウイルバーはアメリカ気象局の局長に手紙でアメリカ各地の風力に関する情報を提供してくれるよう要請しました。これに答えてウイリス・エル・モーアからウイルバー宛てに気象観察雑誌の8月号と9月号が送られて来ました。その気象観察雑誌にはアメリカ気象支局で計測された、全国各地の風速が記されていました。ウイルバーが予想した通り、最も風の強い所はイリノイ州のシカゴ市やニューヨーク州のバファロー市のような湖岸に位置する街でした。田舎で最も風の強い所は、と探してみるとノース・カロライナ州のキティ・ホークという所が見つかりました。それはノース・カロライナ州の海岸とほぼ平行に横たわる帯状の砂州に位置する小さな村でした。地元の人に電話をして確認をした上でオーヴィルはキティ・ホークのすぐ南

にあるキル・デヴィル・ヒルズという名前の砂丘がテスト飛行に最適の条件を備えた場所であると確信しました。

1900年の秋、ライト兄弟は自分たちの作った凧のようなグライダーをテストするために初めてキル・デヴィル・ヒルズの砂丘を訪れました。この後、二人の兄弟はこのキル・デヴィル・ヒルズをテスト飛行のために何度も訪れることになりました。オハイオ州、デイトン市の自転車店で設計し、作り上げたグライダーを、二人はその都度分解して小さい部品にした物をキャンプに必要な物と一緒に自分たちで持って通ったのでした。主翼の枠に使う長い木材等の大きい部品は到着してから地元で購入しなければなりません。キル・デヴィル・ヒルズの砂丘に彼らはキャンプ用に小さな小屋と作業小屋とを建て、この作業小屋でテスト用の飛行機をその都度組み立てたのでした。凧の様なグライダーをここで何度も飛ばしてテストした後、オットー・リリエンサルの揚力計算表を参考に二人は新しい飛行機を設計し組み立ててみました。

しかし結果は惨憺たるものでした。落胆したウイルバーはオーヴィルにこう言いました。「あと1000年くらい経たなきゃ人類が空を飛ぶことなどあり得ないだろう」。彼らの作った飛行機が期待をことごとく裏切る結果を出した事から、彼らはオットー・リリエンサルのデータに間違いがあるのに違いない、と考えました。その結果、ウイルバーとオーヴィルは自分たちの作った1901年型「ライト飛行機」はその設計を根本から変える必要があるという結論に達したのでした。

1902年、何度もテストを重ね、変更と作り直しを繰り返した後、ライト兄弟は新しくエンジン付きの「ライト飛行機」を完成させました。この新しい飛行機で二人は今度こそ飛行のための3つの原則：揚力、動力、操縦、をクリアしたという自信を持ったのでした。この1902年型「ライト飛行機」からあの歴史に残る1903年型飛行機が生まれるのです。

今日では、毎日、何百万人の人が空の旅を楽しんでいます。今日の航空機、例えばボーイング747や、超音速の戦闘機でさえ、ライト兄弟の生み出した飛行工学と3つの原則に基づいて設計されているのです。この二人の功績は、ノース・カロライナ州のナンバー・プレート(世界最初の飛行)と、オハイオ州のナンバー・プレート(飛行機発祥の地)に誇りをもって記されています。ライト兄弟の「世界最初の飛行」はノース・カロライナ州の記念クォーター・コインのデザインにもなっています。

今年是一年を通じてライト兄弟の栄誉を称えると同時に、100年の人類の飛行を記念するさまざまな催しが各地で行われます。例えば、ワシントンD.C.の航空宇宙博物館では、10月から特別展が公開され、今まで天井から吊るされていたライト兄弟の1903年型飛行機のオリジナルが初めて床に置かれて展示されます。ノース・カロライナ州のキル・デヴィル・ヒルズでは、歴史的飛行を遂げた飛行機のレプリカが12月17日の午前10時35分ちょうどに離陸する予定です。ライト兄弟について、または航空100年記念の行事について更に知りたい方はインターネットのホームページ、firstflightcentennial.org 又は centennialofflight.gov をご覧ください。

A letter from the U.S.A. (35) First In Flight

Harumi STEPHENS

[May 23, 2003]

One hundred years ago, on December 17, 1903, at ten thirty five in the morning, the famous first flight in history by the Wright Brothers took place. The Wright Brothers, Wilbur and Orville of Dayton, Ohio flew over the sand dunes on the coast of North Carolina at a place near Kitty Hawk called Kill Devil Hills. A biplane that the Wright Brothers built with spruce wood, muslin cloth, and piano wire for about one thousand dollars made a major breakthrough in the history of aviation that day.

The historical flight lasted for a mere 12 seconds. With younger brother Orville laid prone on the center of the lower wing, piloting, the biplane flew approximately 120 feet. Orville proceeded with two more flights on this day. He flew 175 feet on the second try and 200 feet on the third try. On the fourth try, older brother Wilbur flew 852 feet. It was the first manned, powered flight in history.

On August 9, 1896, only seven years prior to the Wright Brothers' historical flight, a German aeronautical engineer lost his life during his experimental glider flight. Otto Lilienthal was famous for glider research and the first man to launch himself into the air and fly. However, the glider he designed lacked the ability to direct or initiate the flight, which proved fatal. Intrigued by Otto Lilienthal's story, the Wright Brothers began to design and build gliders at their little bicycle shop in Dayton, Ohio. Although neither Orville nor Wilbur had gone to college, they self-educated themselves extensively to solve the existing problem of flying.

When the Wright Brothers had almost completed their first engineered glider, they started searching for an ideal testing site. To test their gliders, not only did they need a wide-open space, but also they needed strong steady wind. Not being able to find an ideal place in Dayton Ohio, Wilbur wrote to Willis L. Moor, chief of the U.S. Weather Bureau, in November 1899, requesting information on winds in various parts of the States. Willis L. Moor then sent Wilbur copies of the August and September issues of Monthly Weather Review. The Weather Review included wind speeds recorded at Weather Bureau stations across the country. As Wilbur expected, most windy places you could find were lakeshore cities like Chicago, Illinois and Buffalo, New York. The windiest rural spot he could find, according to the Weather Review, was the place called Kitty Hawk, North Carolina. It was a remote village situated on the ribbon-shaped sandbank that was almost parallel to the North Carolina shore. After confirming with the locals by telephone, Wilbur was convinced that the sand dunes called

Kill Devil Hills, just south of Kitty Hawk, had ideal conditions for their experiments.

In the fall of 1900, the Wright Brothers traveled to Kill Devil Hills for the first time to test their kite-like glider. Following this initial trip, the brothers traveled to Kill Devil Hills many times for their experiments. Each time, they carried most of the parts of the disassembled kite/glider they engineered in their bicycle shop in Dayton, Ohio, along with camping materials. Large pieces such as the long wood piece used for the wing frame had to be purchased locally once they arrived Kill Devil Hills. On the dunes of Kill Devil Hills, they built a small camp house and a workshop, where they assembled their experimental machine each time. After flying the kite/glider hundreds of times there, they designed and built a new Flyer based on Otto Lilienthal's lift table. They tested their new "Flyer," and the performance was poor. Discouraged, Wilbur made a remark to Orville that, "Not in thousand years will man ever fly!" The poor performance of their "flyer" was not even close to what the brothers expected, and this experimental flight led them to believe that Otto Lilienthal's data was inaccurate. Wilbur and Orville realized that their 1901 "Wright Flyer" needed significant engineering modifications.

In 1902, after countless repetitions of testing, modifying and rebuilding, the Wright Brothers completed a new engine-equipped "Wright Flyer." This time they were confident that they had mastered the three principles of flight: lift, power and control. From this 1902 "Wright Flyer," the historical 1903 Flyer was created.

Today, millions of people enjoy traveling by air each day. Today's aircraft, such as the Boeing 747, or even a supersonic warplane, is designed based on the Wright Brothers' engineering and principles of flight. Their legacy is proudly carried on the license plates of North Carolina ("First in flight") and Ohio ("Birth place of aviation"). The Wright Brothers' "First Flight" is also on the Commemorative State Quarter for the state of North Carolina. Throughout this year, many special events are taking place to honor the Wright Brothers and to celebrate one hundred years of aviation. For example, at the National Air and Space Museum in Washington, D.C. there will be a special exhibition and the original 1903 Flyer, which had been suspended from the ceiling, will be displayed at floor level for the first time. In Kill Devil Hills, North Carolina, a flying replica of the historic aircraft will take off at precisely 10:35 AM on December 17. You can learn more about the Wright brothers and the centennial celebration by visiting [firstflightcentennial.org] or [centennialofflight.gov] on the Internet.

[2003年5月23日记]

一百年前,1903年12月17日上午10:35,莱特兄弟威尔伯和奥维尔进行了有名的历史性飞行。他们从俄亥俄州Dayton市来到北卡罗来纳州靠近Kitty Hawk的海岸边,在Kill Devil Hills沙丘上空作了飞行。莱特兄弟花了约1千美元以桧木、平纹细布、钢琴线做成的双翼机在那一天实现了飞行史上的重要突破。

历史性的飞行持续了12秒,弟弟奥维尔伏坐在双翼机下层的中央操纵,飞行了约120英尺。奥维尔接着试飞了两次,第二次175英尺,第三次200英尺。第四次由哥哥威尔伯试飞,飞行距离达852英尺。这是历史上首架载人动力飞机。

在莱特兄弟历史性飞行的7年之前,1896年8月9日,一名德国航空工程师在滑翔飞行实验中丧生,他就是有名的滑翔机研究者Otto Lilienthal,是第一个乘滑翔机飞上天空的人。但他研制的滑翔机不能改变飞行方向,而且离开风就不能飞,这是致命的弱点。Otto Lilienthal事件激起了莱特兄弟的兴趣,他们开始在自己小小的自行车厂里设计组装滑翔机。威尔伯和奥维尔均没上过大学,他们靠自学解决了通向飞行之路上发生的种种问题。

当莱特兄弟即将完成他们设计的第一架滑翔机时,他们开始寻找理想的实验场地。为了测试他们的滑翔机,不仅需要宽阔的空间,而且需要强风。

在俄亥俄州Dayton市找不到理想的地点,威尔伯于是在1899年11月写信给美国气象局局长Willis L. Moor,请求提供美国各地的强风信息。Willis L. Moor给威尔伯寄来了8月和9月的气象观察杂志。气象观察杂志记载了各气象分局测定的全国各地的风速。不出威尔伯所料,大部分风场位于伊利诺伊州芝加哥、纽约州Buffalo等湖畔城市。他找到的最强劲的农村风场是北卡罗来纳州的Kitty Hawk。这是个偏远的村庄,坐落在几乎与北卡罗来纳州海岸平行的沙丘上。威尔伯给该地打电话询问情况后,确信Kitty Hawk南边的Kill Devil Hills沙丘,具备他

们实验所需的理想条件。

1900年秋天,莱特兄弟第一次来到Kill Devil Hills沙丘试验他们的风筝型滑翔机。在此初次行程后,莱特兄弟又多次到Kill Devil Hills进行了实验。每次他们都带去了在自己的自行车厂制造的大部分风筝型滑翔机零部件及露营所需的物品。大件物品,如机身、机翼框架的木料,则在当地购买。他们在Kill Devil Hills沙丘上建起了临时房屋和工作棚,每次都在此组装实验机。在此进行了一百多次风筝滑翔机飞行后,他们参考Otto Lilienthal的飞行记录,设计制造了一架新“飞行者”。

他们试验了新“飞行者”,但结局悲惨。威尔伯失望地对奥维尔说:“人类要在一千年以后才能飞翔。”飞行者的悲惨结局打破了他们的希望,使他们相信Otto Lilienthal的数据是有错误的。威尔伯和奥维尔认识到,需要对1901“莱特飞行者”作重大改进。1902年,经过无数次实验、改进、重造,莱特兄弟完成了新的带发动机的“莱特飞行者”。这次,他们确信已经达到了航空3原则,即飞行、动力和控制。在1902“莱特飞行者”的基础上,又产生了具有历史意义的1903飞行者。

现在,每天都有几百万人乘坐飞机。今天的飞机,如波音747及超音速战斗机都是根据莱特兄弟创造的飞行工学及飞行3原则设计的。北卡罗来纳州的金属铭牌“首次飞行”和俄亥俄州的“航空技术诞生之地”标志着他们的功绩。俄亥俄州的纪念币的图案也是莱特兄弟的首次飞行。在今年,举行很多活动以纪念莱特兄弟和庆祝飞行历史100周年。华盛顿国家航空宇宙博物馆将从10月起举办专题展览,至今一直悬挂在天花板下方的1903飞行者原件,将被首次放置在地板展出。在北卡罗来纳州Kill Devil Hills,该历史性飞机的复制品将在11月17日上午10:35起飞。如果你想更多地了解莱特兄弟和一百周年庆祝活动,请访问[firstflightcentennial.org]或[centennialofflight.gov]网站。

[翻译:王菲]



ニュージーランド便り (27) アオテアロアより

外石 弥生 (日本)

【2003年6月21日記】

イースター休暇が終わるとNZは事実上、夏の終わり宣言となります。今年のイースター休暇はアンザックデーの休暇とつながり、3日間の有給を使い11日の長期休暇にして過ぎ去る夏を謳歌した人が少なくありませんでした。

日本同様、四季のあるNZですが、春夏秋冬どの季節が好きかを尋ねて「冬が好き」と答える人がいったいNZにはどれだけいるのだろうか…。オークランドは気温5度を下回することはまずなく、日本の冬と比較すれば寒さが厳しいとはいえませんが、NZの冬は雨が多く、湿度が高くなるので耐えず除湿に気を配らなければ、部屋やタンスの衣類がかび臭くなります。天気も、晴れのち豪雨、のち晴れ、のち曇り、のち雨等々…。パターンが読めません。このような天気を「女心と冬の空」とは言わせませんが、何とたとえたらよいのでしょうか。やはりNZは眩しい太陽と白い雲がたなびく青い空しか似合わないと思うので、冬は大嫌いと言っても過言ではありません。

さて、今年は秋口より水不足から電力供給の危機にさらされていました。ガスエネルギーの依存度は低く、電力が途絶えたら暖房、シャワー、調理、給湯にも支障が出てきますし、国民には10%の省エネが義務づけられ、街のネオンの照明もおとされました。ライフラインであっても供給不足になれば企業が勝手に値上げしてしまいますから、水産加工工場では電力料金の値上げから操業停止に追い込まれたところもあったくらいです。日本はなぜかエネルギー不足に陥るのは夏であり、冬に危機が迫った事は過去にあったでしょうか。

日本の夏の電力不足と、NZの冬の電力不足…。季節は違えども、時期は同じ、北と南半球では同じ問題を抱えているようです。

NZの人口は増え続け、先日は400万人を越えたと報道がありました。現在、アジア系は27万人程度ですが、これが2012年になると60万人を越えると試算されています。ということは、その試算通りに人口が増え続けることを想定して政府は電力供給対策を立案しているのだろうか心配になります。一方、世界都市の住みやすさ調査では、オークランドは前回の6位から一位上がりコペンハーゲン、フランクフルト、シドニー、ベルンと並び5位にランクされました。これには政治、社会、経済、医療、教育、交通等の39分野の調査結果によるものだと思いますが、1位のチューリッヒや2位のバンクーバー、ウィーン、ジュネーブの次にランクされるほど、快適なのかとは実際の住人は知るすべはありませんね。

幸い降雨量は順調に増え続け、クライシスの終了宣言が数日前に出されました。やれやれ、これで冬を越せるメドがたったと一安心、さて冬至は何時だったかしら…。それが今日だと知り、なんとなく気分まで晴れてきました。今日はロングナイトで明日はショーテストディ(昼間が一番短い日=冬至)。NZでは二日間にまたがった表現をしています。もういくつ寝ると夏になるのだろうか…。明日はかぼちゃでも食べるとしよう。

NZには珍しい野菜や果物が沢山あります。また日本の品種も日本名のまま浸透しているものも珍しくありません。サツマ(みかん)。因みにサツマ芋はクマラと呼んでいます)、フユ(柿)、フジ(りんご)、ダイコン、ナシ、ミズナ、ワサビ、シイタケ、エノキ、ゴボウ等々…。そしてかぼちゃは3種類あります。パイナップル、パンプキン、機会があったら是非お試し下さい。



A letter from New Zealand (27) Hello from Aotearoa

Yayoi SOTOISHI (Japan)

[June 21, 2003]

When the Easter holiday is over, it hints at the end of the summer season in New Zealand. As the holiday this year was connected with Anzac Day, there were not a few persons who enjoyed the end of summer by making use of a long eleven-day vacation, including their three paid holidays.

There are four seasons in New Zealand, as in Japan, but when asked which season they like best, spring, summer, autumn or winter, I can't tell how many residents may reply "I prefer winter." In Auckland the temperature seldom falls below 5°C. Compared with winter in Japan, it is not so terribly cold. During the winter in New Zealand, however, there is a lot of rain and high humidity. So, unless they use a dehumidifier, rooms and clothes in chests of drawers get a musty smell. The weather is difficult to forecast because it's changeable, for example from fine to heavy rain, then fine, then cloudy, then rain, etc.... I don't want to say such weather conditions "are as fickle as a young girl's heart or an autumn sky," but what do you think is a good phrase for these weather conditions? I think that a dazzling sun and a blue sky with floating white clouds is the most suitable for New Zealand, and it is not too much of an exaggeration to say that I hate the winter there.

By the way, we have been facing an electricity supply crisis due to a shortage of water since autumn this year. In New Zealand, where dependence on gas for energy is low, we suffer some difficulties with heating, showering, cooking and hot-water supply when electric power is cut off. This season, the public was obliged to cut energy usage by 10% and neon illumination in the city was turned off. Even for necessary facilities, the power companies unilaterally raise electric rates when there is a shortage. Because of the rising electric costs, some marine product processing plants were forced to suspend operation. In Japan, energy shortages happen in summer. Do you know whether Japan has ever faced a crisis in winter? Energy shortages in summer in Japan and winter in N.Z.... The northern and southern hemispheres seem to have the same problem at the same time although their seasons are opposite.

It was reported that the population of N. Z. continues to increase and exceeded four millions some days ago. There are about 270,000 Asian residents at present and it is estimated that the number will exceed 600,000 in the year 2012. With regard to this issue, I am concerned about the possible electricity supply measures that the Government should take on the assumption that the population will increase as expected. Research on a pleasant living environment in the world's cities shows that Auckland was one rank up from its previous sixth place and is now equal with Copenhagen, Frankfurt, Sydney and Berlin. I hear that this ranking was the result of research conducted in 39 fields such as political, social, economic, medical, educational and traffic issues. But local people have no way to confirm that the real living environment in Auckland is as comfortable as those ranked above it: Zurich at the top, Vancouver second, Vienna third and Geneva fourth.

As the amount of rainfall fortunately continued to increase, the end of the electricity crisis was declared several days ago. Finally I felt relieved to that we would manage to pass this winter. I wonder when the winter solstice is...? When I learned it was today, I felt refreshed, too. Today is the longest night and tomorrow is the shortest day (winter solstice means the shortest day of the year). In New Zealand this expression is used for a two-day period. How many nights do we have to sleep until summer comes? Tomorrow I would like to eat pumpkin. There are many unique vegetables and fruits in New Zealand. It's not rare for Japanese produce to be introduced with the original Japanese names. Some examples are satsuma (orange; sweet potato is called kumara), fuyu (persimmon), fuji (apple), daikon (radish), nashi (pear), mizuna (potherb mustard), wasabi (horseradish), shiitake (shiitake mushroom), enoki (hackberry), gobou (burdock), etc... -and there are three kinds of pumpkin. Don't miss trying pineapple-pumpkin if you have a chance.

[Translated by: N. NARITA]

新西兰鸿信 (27) 来自阿欧泰阿罗阿

外石 弥生 (日本)

[2003年6月21日记]

在 NZ 放完了复活节後实际上可宣告夏季已结束了。今年复活节之休假与抗战纪念日相连，有不少人讴歌著请几天假，就可过个 11 天的长期夏季休假。

NZ 与日本同样，有分明的四季，如有人问春夏秋冬喜欢的是那一季如回答是冬季者，我想知道那位人士，到底在 NZ 呆了多久。在奥克兰温度不会低於 5 度以下，与日本相比并不算是严冬，NZ 的冬季多雨只要温度一升高湿气就重，得注意除湿，否则房间衣橱就会发出霉臭味。另外天气也是变化多端，晴後豪下雨，而後晴，而後阴，而後雨，搞不清个固定形式。虽不能说这样的天气如女人心，那又该如何比喻才恰当呢？这样说最讨厌冬季也不算过言。总而言之，我想 NZ 只适合眩辉的太阳和层层翻涌白云。

一般来说对瓦斯能源之依存度不高。呀！今年秋冬而临到水力发电的供给危机。但对电力能源中断，暖气，洗澡淋浴，烹调，热水之供应，就出了问题，政府呼唤国民节约 10% 的能源，街上的霓虹灯也都折取下来。生活必需能源供不应求，企业也任意提升价钱，甚至影响到，水产加工场因电费涨价而被迫停止机器转动这种程度，日本为何只有夏季而临到能源不足之危机过去在冬季是否也遭遇到这种危机过呢？

南北半球都而於著相同的问题。季节虽不同，但时

期是相同，日本夏季电力不足和 NZ 的冬季电力不足。NZ 之人口一直逐渐在增加，前不久才报道人口已超过 400 万人。现在亚洲系人口有 27 万人如按照这个试算方式到 2012 年人口就会超过 60 万人。因此政府担心如果按照这计算方式推想政府就立案电力供给之对策吧！在世界都市生活起居舒适度之调查中，奥克兰在前一次调查是排第 6 名，这次提升了一名次於哥本哈根，富兰克福鲁德，西尼，柏林，排行第五名，这报告是由政治，社会，经济，医疗，教育，交通等 39 项目的调查结果。

幸好，降雨量很顺利，继续增加前几日发表了危机结束宣言。这下可好安心一下，总算有了一个越冬的心里准备。直到今天才知冬至何时到来，心情多少就晴朗一些。在 NZ 冬至是连跨二日的说法，今天最长的一夜明天是最短的一天（冬至=白昼最短的一天）。还要睡过多少天，才是夏天呀！明天是吃南瓜之日吧！

在 NZ 有很多新奇的蔬菜水果。另外也有照日本原名使用而於当地渗透之日本品种也不算很稀奇。有番薯、橘子（番薯另一别名叫古麻拉）柿子、苹果（富士）、萝卜、梨子、水菜、山榆菜、香菇、朴菇、牛蒡等。另外南瓜有三种，如有机会请试吃一下菠萝和南瓜。

[翻译：和氣 由季]

日本語で話す会 / "Let's Chat in Japanese"

港区国際交流協会では、日本語を勉強していても実際に話す機会がない外国人の方、新しく友だちをつくりたい、話題に興味をお持ちの外国人の方を対象に「日本語で話す会」を毎月第二または第三土曜日に開いています。中級レベルでは身近な話題を中心に、上級レベルでは時事問題を中心にお話を進めます。LCJ ボランティアスタッフがお待ちしております。ぜひ一度、ご参加ください。

日にち： 9月20日（土）、10月18日（土）、11月15日（土）午前11時～12時30分

場所： 三田 NN ホール スペース D （港区芝 4-1-23）

If you do not have any opportunity to speak it out in spite of studying Japanese, or if you want to make friends, and have an interest in discussion/exchange of opinions, you are welcome to join our LCJ, "Let's Chat in Japanese," meeting. We have intermediate and advanced levels. Let's have great fun chatting in Japanese!!

Date: Saturdays, Sept. 20, Oct. 18 and Nov. 15

Time: from 11:00 a.m. to 12:30 p.m.

Place: Mita NN Hall, Space D, 4-1-23 Shiba, Minato-ku, Tokyo

レッツ・チャット・イン・ジャパニーズ(LCJ)

池田 豊治(LCJスタッフ)

港区国際交流協会では、プログラムの一つとして、原則的には第三土曜日の11:00a.m.～12:30p.m.に、三田NNホール(港区芝4-1-23)で「日本語で話す会」(Let's Chat in Japanese)を開催しております。

毎回、テーマ(たとえば、日本の行事とか、世界のスポーツ事情など)を決めて、司会者を中心に、あらかじめ用意したプリント(漢字には、ひらがなのルビが振ってあります)を参考に、日本人、外国人それぞれが自分の意見を述べて、問題なり話題なりを発展させ、相互理解を深めていきます。

「日本では、まじめなことを話し合うという風潮がない」と、ある大学教授が著書の中で述懐しておりますが、確かに、欧米などの学生に比べて、日本の学生は自ら口を開くことを苦手としてきました。(大学の授業などでも、教授が講義ノートを読みながら講義を行い、学生がそれをノートに書き移すといった形式が普通でしたから)

それでも、大学のゼミなどでは質疑応答があったり、討論をしたり、中学・高校あたりでは、肯定側と否定側とに分かれて論争する、ディベートなども盛んになってきております。

日本人の参加者からは日本のことをもっと伝えたい、外国の方々には自国のあれこれを知ってもらいたいのは当然で、日本語を習得中の在日外国人の皆さんも、この会を利用して、日本語に慣れる手頃な機会としてほしいのです。

この集まりは、いわゆるフリー・トークですから、文化や、政治・経済・風俗・習慣など、まったく自由気ままに発言できます。

身近な国際交流として、国籍を超えた友人ができるチャンスでもあります。

変なイントネーションの近頃の日本語ばかりでなく、この集いでも年配の出席者もおりますから、自然で、いわゆるネイティブな日本語も耳にしてください。

トーク・ライブは今、トレンドとして注目され、TBSラジオが平日の午後10時から、ゲスト・コメンテーターを招いて、リスナーと電話やファックスで激しい意見交換をしております。

当会でも、個性あるゲストが入れ替わりお越しくださり、エンターテインメント性さえ醸し出せたら最高です。

Let's Chat in Japanese (LCJ)

Toyoharu IKEDA (LCJ Staff Member)

One of the programs sponsored by MIA is "Let's Chat in Japanese," generally held on the third Saturday of the month from 11 AM to 12:30 PM at Mita NN Hall (4-1-23 Shiba, Minato-ku). A theme (for example Japanese events, world sports information) is chosen for each meeting and a printed sheet is prepared in Japanese (with kana readings shown for the kanji). The moderator leads the discussion, referring to the prepared sheet, and Japanese and foreigners present their opinions, developing the theme through discussion of problems to deepen mutual understanding.

One Japanese university professor wrote in his book, "There is no tendency among the Japanese to discuss serious things." It is certainly true that, compared to university students in the US and other countries, Japanese students shy away from opening their mouths. (Even in university classes, it is usual for the professor to lecture, reading from his lecture notes, while the students copy these notes into their notebooks.) Even so, there are questions and answers and debates at university seminars and at the junior high and high school levels debate is quite popular, with the affirmative and negative sides arguing against each other.

Of course, Japanese participants want to tell others more about Japan and foreigners want others to know more about their countries and for foreign residents learning the language, these meetings provide a good opportunity to become familiar with Japanese.

The gatherings are based on free discussion, so participants are free to talk about culture, politics, economics, manners, customs - or anything else. This is a chance to make friends with no national boundaries, a near-at-hand form of international exchange. As older Japanese also attend these meetings, it is an opportunity to hear natural native Japanese, not only the strange intonation used nowadays.

"Talk Live," a program on TBS radio starting at 10 PM on weekday evenings, has been attracting attention as the current trend. The guest commentator for the evening holds intense exchanges of opinion with listeners by phone or fax. It would be great if a variety of individualistic guests would take turns attending our meetings and give them a feeling of entertainment.

[Translated by: L. KAWASHIMA]

让我们用日语进行对话 (LCJ - Let's Chat in Japanese)

池田 丰治 (LCJ 成员)

作为港区国际交流协会工作的一环，原则上每周第三个星期六的 11:00 ~ 12:30 在三田的 NN 会馆（地址：港区芝 4-1-23）举办 "日语交流会" 活动 (Let's Chat in Japanese)。

每次活动都拟定一个题目（比如：日本的各种仪式和活动、世界体育等等），以主持人为中心，参考事先印好的资料（资料中有汉字的地方都用平假名标注读音），日本人和外国人各自陈述自己的意见，随着话题的展开，加深相互理解。

某大学教授在著书中提到："在日本，没有谈论正经话题的风气"，的确，与欧美的学生相比，日本的学生不善于主动开口，大学里的教学方式一般也都是由教授读讲义，学生再将它转记到笔记本上。但是，目前在大学的研究班里开展讨论、在初中和高中将学生分为赞成和反对两组进行论争等形式正在日益增多。

在这个日语交流会上，日本人可以介绍更多有关日

本的事情，外国人可以介绍各自国家的风土人情，对于正在学习日语的外国朋友来说，这是一个练习说日语的好机会。

在这里，完全采用自由谈论的方式，参加者可以就文化、政治、经济、风俗、习惯等话题自由发表意见。这也是我们在日常生活中接触国际交流的机会，可以跨越国籍结识很多朋友。

在这里，不仅可以听到目前日语口语中出现的各种不同的声调，由于参加者中有许多年长的朋友，因此也能够接触到自然纯正的日语。

目前，交谈作为一种新的时尚正在受到人们的注目，TBS 广播电台周一到周五从晚上十点开始，邀请喜剧嘉宾与听众用电话和传真进行热烈的讨论。

我们这个集会也有许多富有个性化的嘉宾前来参加，必将使活动充满丰富多采的娱乐气氛。

[翻译：栗文霖]

英語で異文化再発見 / "Let's Rediscover Japan"

港区国際交流協会では、英語による「異文化再発見」の会を毎月原則第二または第三土曜日に開いています。

日本について、知っていると思っていても、まだ見落としていることがあるかもしれません。また、海外のことを知ることで、日本のことを知ることもあるかもしれません。

このプログラムでは、毎回、スピーカーが一つの話題を提供します。スピーカーのお話を聞くだけでなく、参加者同士のフリーディスカッションの時間もあります。

興味をお持ちの方、ぜひ一度ご参加ください。新しい発見があるかもしれません。

日にち： 9月20日（土）、10月18日（土）、11月15日（土）午後1時30分～3時30分

場所： 三田 NN ホール スペース D（港区芝 4-1-23）

This program for rediscovering Japan is conducted in English. Meetings are held monthly on the second or third Saturday. Can you fully and confidently express yourself when discussing Japan and your own country? There may be some things you have overlooked or features which you will want to reexamine after hearing someone else's ideas. Meetings include time for free discussion among participants. Everyone is welcome!

Date: Saturdays, Sept. 20, Oct. 18 and Nov. 15

Time: From 1:30 p.m. to 3:30 p.m.

Place: Mita NN Hall, Space D, 4-1-23 Shiba, Minato-ku, Tokyo

South Wind 原稿 — トイレ事情大募集

昨今、口から摂取するものに対する意識が変わりつつある。多少の高価にかかわらず有機栽培野菜などを求める人口が増えている。添加物や農薬への危惧が人々を自然志向へと戻しているらしい。

では、自分の排泄物に対する意識はどうだろう。摂取から排泄まで一貫して消化の様子を観察しなければ真の健康管理とは言えないのではないだろうか。おむつからトイレに移りたがらない赤ん坊の中には、自分の一部だと感じていた排泄物が水洗で消されてしまうのを怖いと思うためという子もいるそうだ。本能のままであれば、人も他の動物同様、もっと排泄物に愛着を持っていたらどうか。

日本語では便所のことを、今では「トイレ」または「WC」、「お手洗い」などと言うことが多いようだ。中国語からの「廁」、主に女性語としての丁寧な「ご不浄」、「はばかり」、「おちょうず」、あるいは禅宗用語の「雪隠」などの別名も未だ生きている。数多い呼び名に便所という場所に対する感懐が察せられる。

Your speculation about the world's toilets

These days many people have become more conscious of the sources of what they eat. More people look for organically grown vegetables, although they are usually more expensive than ordinary vegetables at the market. Concern about pesticides and additives is driving people toward natural foods.

Then, how about excrement? You can't be a perfect controller of your health unless you observe your diet from intake to excretion. I've even heard that some babies don't want to give up diapers because they fear that something pushed out of their bodies is flushed away. If a human being still lived by instinct, would he feel more attached to his bodily waste just like some animals do?

Today, the lavatory is popularly referred to as "Toire or Toilet," "W.C.," or "O-tearai or hand washing place" in Japanese. Just like in English, there are many other Japanese argotic appellations for it in addition to "Kawayu" from Chinese origin; "Go-fujo," "Habakari," and "O-chozu" that are often used by women in polite conversation; and "Secchin" from the one in the Zen Buddhist temple. The variety of appellations implies certain a perception of people toward the lavatory.

South Wind 原稿 — 厕所情况大征稿

近来，人们对摄入量中的东西所持有的意识正在逐渐发生变化。尽管价格有点昂贵，但是购买有机栽培蔬菜的人口却有增多。对添加物以及农药的危惧似乎正将人们的意识归还到大自然。

那么，人们对自己的排泄物又持有怎样的意识呢？如果不是从始至终对从摄取到排泄的消化状况进行观察的话，是不是就谈不上是真正的健康管理呢？在不愿意从尿布排泄改为到厕所排泄的婴儿当中，听说也有将排泄物当成是自己身体的一部分，因害怕被水冲走消失而感到恐惧的孩子。倘若随其本能，那么，人也应该和其他动物一样，对自己的排泄物更加留恋吧。

日语当中，如今虽然把厕所多数称为「toilet 或者简称为 toile」、「WC」、「洗手间」等，但是仍然使用从中文来的「廁」以及主要作为女性用语的礼貌语「不浄」、「隠所」、「解手间」，还有禅宗用语的「雪隠」等别名。如此为数众多的称呼，可窥知人们对厕所这一场所的感怀。

和風便器に戸惑った経験を持つ外国人は多そうだ。公衆便所の壁にある落書きに嫌悪を覚えた人もいるだろう。卑近な例だが、ユーゴスラビアで公園のトイレに入った夫が真っ赤な顔をして飛び出してきたことがある。小便器が高すぎて届かず、用を果たせなかったらしい。旅先の用便で苦渋を味わった人は存外多いのかもしれない。

サウス・ウィンド編集部内の雑談の中で、ひょっとするとこうしたトイレ事情から、その土地の人々の生活ぶり、衛生や健康に関する意識の違いなどが浮かび上がってくるのではないかと、という意見が出た。

臭いものに蓋をせず、誰にも共通の生理現象を見直し、感心したり驚いたりする各地でのトイレ事情にまつわる投稿を大募集します。極めて個人的なこの空間と時間で、哲学してみませんか？

サウス・ウィンド編集長：中野義子

Many foreigners may have experienced an uneasy time with the Japanese-style flat lavatory. Some may have been fed up with filthy graffiti on the walls of public toilets. Allow me to give an example from my experience. While we were traveling in Yugoslavia, my husband rushed blushing out of a toilet in the public park. The fact was that the piss pot was too high for him to urinate into. Quite a few tourists may have been embarrassed by toilet troubles outside their home countries.

In idle conversation among the editors of South Wind, the idea came up of suggesting an investigation of what people have experienced in the world's lavatories. By so doing, we may be able to see different ways of living, different concepts of hygiene and health care among the people in the world.

We look forward to your contribution of articles featuring the toilet situations in the world that impressed you. Wouldn't you like to speculate on matters in the private time and space specially reserved for you?

Yoshiko NAKANO, Editor in Chief

经历过面对日本式厕所而不知所措的外国人似乎很多。想必也有人公厕墙壁上的涂鸦深感厌恶吧。举个浅近的例子，我丈夫曾经在南斯拉夫的一个公园里上厕所，却憋红了脸从厕所里蹦了出来。因为小便池太高够不着，没办法解手。饱尝在旅途中解手之苦的人说不定意想不到地大有人在吧。

我们 South Wind 编辑部在内部杂谈中，有人谈到，从这些厕所情况中或许可以获知当地人们的生活方式以及对卫生、健康所持有的不同意识。

我们热烈欢迎大家积极投稿，畅谈类似于对于臭物不盖盖子，重新认识对任何人来说都共通的生理现象及令人赞叹、令人吃惊的有关各地的厕所情况。在这个极为隐私的空间和时间，不来探讨一下哲学之理吗？

South Wind 主编：中野 义子

[翻译：蔡海东]

編集後記

『サウス・ウィンド』に寄稿された記事は日本語、英語、中国語だけでなく、内容に応じて、これまで西語、仏語などその他の言語でも併せて掲載してきました。今号には初めてハンデルが登場しています。趙さんが自らの母国語をコンピューター入力してくれたものです。言語数が増えるに従って、煩雑さを増す編集作業が伴います。視覚上、すっきりとした紙面配分も難しくなり、読者にとっては読み進み難いページも多くなることでしょう。

編集会議ではこうした多言語併載に前向きな成果は出ているのだろうか、との意見をめぐって論議が展開しました。結果、それらの言語を解さない者にとっては確かに読み辛くなるだろう反面、母国語ならではの気安さで読める人に対して本人とは異なる文化に基づいた意見を知る機会を提供するのも本紙の使命と考えようではないか、ということになりました。そして多言語季刊紙『サウス・ウィンド』が港区国際交流協会の活動目標である異文化交流に深く踏み込むきっかけとなれば幸いです。

編集長：中野 義子

Post-script

The articles in South Wind are usually carried in three languages: Japanese, English and Chinese. Sometimes they are translated into an additional language related to their content, such as Spanish or French. The present issue No. 39 carries a Korean version of an article that Mr. Cho Hyun-chul submitted in his own language as a contribution to South Wind.

The more different languages we have, the more complicated our editorial work becomes. It may result in more pages that readers find hard to follow due to the disproportionate amount of space required for the additional translation.

The Editors of South Wind discussed these problems to see if any positive reaction can be expected by printing the same article in several languages. Our conclusion was that it would be worth offering an opportunity to those who feel it easier to read the article in their own language and learn about the opinions of people from different cultural backgrounds, in spite of the fact that it may cause some discomfort to those who do not know the particular language.

We feel that South Wind may be able to play an active role in attracting more different people to attain the goal of Minato International Association by issuing the quarterly in several languages for better multi-cultural exchange.

Yoshiko NAKANO, Editor in Chief

编辑后记

给「南风」投稿的报导不只是日语、英语、中国语、到目前为止还根据内容同时刊载了西班牙语、法语等其他语言，在本期韩国语初次登场，是赵先生把自己的母语给我们输入到电脑里的。随着语言数的增多，而伴随着编辑工作烦杂度的增加。在视觉上，通畅的版面分布也会变难，而且对读者来说看起来很麻烦的页数也有所增多。

在编辑会议上展开了围绕刊载此类多国语言是否出现积极性成果之意见的讨论。结果是认为对于看不懂哪些语言的人来说确实是看起来很麻烦。但相反，对于可以自如的看自己母语的人来说，给其提供了解与本人不同文化之见解的机会，这不正是本刊的使命吗。为此多国语言的季刊「南风」如能成为深入港区国际交流协会的活动目标，即异国文化交流的开端，将感到非常幸福。

编辑长：中野 义子
[翻译：张晓鸿]



投稿募集

港区国際交流協会翻訳委員会では、紙上を意見発表／交換、討論の場として、多様性を認識し、一層深い理解と友好を互いに深め合うことを目的として「South Wind」を発行しています。皆さまの投稿をお待ちしております。なお、掲載についてはSW編集部で検討させていただきます。

- ① South Windに掲載された記事は港区国際交流協会の website に掲載されることもあります。
- ② South Windに掲載された記事についての著作権は港区国際交流協会に帰属します。
- ③ SW No. 40 テーマ：世界のトイレ事情（投稿締切日＝9月30日）

投稿方法： 原稿は原則として日・英・中のいずれかを使用してください。投稿原稿の字数は800字以内をお願いします。

宛先： 105-8511 港区芝公園 1-5-25 港区役所8階
港区国際交流協会事務局 South Wind編集部
Fax: (03) 3578-3537 E-mail: s-wind@minato-intl-assn.gr.jp

Your Contribution is Welcome

By exchanging opinions with other people, who are from different cultures or backgrounds, in “South Wind,” we hope we are able to recognize the diversity of our society and deepen our mutual understanding and friendship with each other. Please take full advantage of this opportunity to express your opinions! The Editorial Committee reserves the right to accept, reject and/or edit articles submitted for publication.

1. Minato International Association reserves the right to publish all articles submitted for publication in South Wind on their website (<http://www.minato-intl-assn.gr.jp>).
2. Copyrights on all articles submitted for publication in South Wind become the sole property of Minato International Association.
3. Deadline for articles on “Toilets Around the World” for SW No. 40 is September 30.

How to contribute: Please submit your essay written in Japanese, English or Chinese; essays should be between 800 and 1,200 words.

Send contributions to: South Wind Editorial Room; Minato International Association
Minato City Hall 8th Floor, 1-5-25 Shibakoen; Minato-ku, Tokyo 105-8511
Fax: 03-3578-3537 E-mail: s-wind@minato-intl-assn.gr.jp

募稿

目前港区国際交流協会翻訳委員会出版名叫“South Wind”の小報。基于不同国家之文化风俗等，互相提出各种各样的意见，将该报当看发表所交换所想讨论各个意见之场所，进一步加深相互理解加强交流为其目的。欢迎各位积极投稿。将由编辑部研究决定是否采用。

- ① South Wind里登载的文章也可能在港区国際交流協会の website 里发表。
- ② South Wind里登载的文章的著版权是归港区国際交流協会所有。
- ③ SW No. 40 主题：「世界各国的厕所情况」（投稿截止日期＝9月30日）

投稿方法： 原稿原文请用下面的语言：日语、英语、中文，投稿原稿的字在800字以内，请多关照。

收件地址： 105-8511 港区芝公園 1-5-25 港区区役所8楼
港区国際交流協会“South Wind”编辑部